

2020年9月13日
聖霊降臨後第15主日
東京聖三一教会

シラ書 27:30-28:7
ローマ 14:5-12
マタイ 18:21-35

七回どころか七の七十倍までも赦しなさい

司祭 シオン 林永寅

先週に引き続き、今日の聖書日課のテーマも赦しです。

今日ご一緒に読んだ福音書のみ言葉は、ペトロの問いから始まっています。ペトロはイエス様にこのように尋ねました。

「主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯したら、何回赦すべきでしょうか。7回までですか。」(マタイ 18:21)

当時のイスラエルの人々は、赦しの限界を「3回」であると思っていました。わたしたちも、「3回までは赦そう」と話すことがあるでしょう。しかし、ペトロは七回までです。ペトロはこのように問いながら自慢したい気持ちもあったようです。七回まで赦しますと言えば、イエス様に褒められるであろうと思っていたようです。けれども、意外にイエス様はむしろペトロには厳しくも、このようにお話しなさいました。

「七回どころか七の七十倍までも赦しなさい。」(22)

「七の七十倍」を490回赦しなさいという意味で理解している方はいらっしゃらないでしょう。このような限りない赦しは、不可能のように思われます。そして、「なぜそれほどまで赦さなければならないのか」という疑問を抱くようになります。イエス様は、なぜそれほど「赦し」を強調なさるのでしょうか。それは、わたしたちが赦された者であり、神様に負い目がある者だからです。ところである方は、「なぜ、わたしたちが神様に負い目になる者なのか」と尋ねる方もいらっしゃるかもしれません。一体どんな負い目があるのでしょうか。

この問いに対する答えを尋ねるためにイエス様がおっしゃった喩話をみてみましょう。

この喩話は、ある王と家来が貸した金の決済をする場面から始まります。この家来たちは税金を徴収し、王に捧げる税金徴収員の役割をする高官だったようです。しかし、この家来は長い間、この仕事をおろそかにしてきました。そのため、この家来は王に1万タラントンほどの借りを作ってしまいました。皆さんは、この1万タラントンがどれほど大きなお金なのか想像がつかないでしょう。当時のガリラヤの年間の貢ぎ物は200タラントンにも満たなかったそうです。したがって、1万タラントンはガリラヤ地方の人々が50年間払わなければならない税金に当たる大金にたります。1タラントンは6千デナリオンで、1デナリオンは当時の労働者の1日の賃金に当たるものでした。それゆえ、1万タラントンは6千万人の賃金に当たる非常に大きなお金です。喩話に登場する家来は王にこのような借りを作ってしまったのです。すると王は、「自分も妻も子も、また持ち物も全部売って返済するように」と言いました。当時の奴隷は500デナリオンないし2千デナリオンほどのお金で売られました。ですから、自分と家族を全部売っても、この借りを返すことはできません。するとこの家来は王に、「どうか待ってください。きっと全部返します」としきりに願い求めました。この家来の話は守れない約束

でした。けれども、王はこの家来を憐れに思って、彼を赦し、借金を帳消しにしてくれたのです。この家来はまるで死から生き返ったような感じだったでしょう。

さて、この家来は借金を帳消しにしてもらおうと否や出てきて、自分に百デナリオン(三ヵ月分給料ほど)の借金をしている仲間に酷い仕打ちをしました。そして借金を全部返す時まで牢に入れてしまったのです。この事の次第を見た仲間たちが黙っているはずはありません。王に告げました。すると王はこの家来を呼びつけて、このように叱りながら、その家来を「借金をすっかり返済するまでと」牢に閉じ込めたのです。

「不屈きな家来だ。… わたしがお前を憐れんでやったように、お前も自分の仲間を憐れんでやるべきではなかったか」(32-33)。

喩話は借金についての物語ですが、イエス様の当時使っていた言葉であるアラム語は罪と借金が同じ単語です。それでイエス様は、罪と赦しのお話を、借金とその帳消しのお話に例えておっしゃったのです。それではわたしたちは神様にどんな借りを負っているのでしょうか、イエス様のこの喩話を通して理解できるでしょう。

今日ご一緒に読んだシラ書にはこのように記されています。

「人が互いに怒りを抱き合っていないながら、どうして自分の罪の赦しを願いえようか。」(シラ 28:4)

また、今日ご一緒に読んだローマ書を通して、使徒パウロもこのように尋ねています。

「なぜあなたは、自分の兄弟を裁くのですか。また、なぜ兄弟を侮るのですか。わたしたちは皆、神の裁きの座の前に立つのです。」(ローマ14:10)

ある神学者は、信仰者の罪の項目の中に、「赦さなかった罪」もあると言いました。けれども、自分が被害者になった場合には、このような話は聞き入れられないものです。大きな財産損失を被ったり、取り返しのつかない怪我を負ってしまった場合には容易に赦せません。家族が死に至った場合にはなおさらでしょう。むしろ、「なぜ、赦さなければならないのか」と問い返されます。それにもかかわらず、教会では赦しを勧めています。なぜ赦さなければならないのでしょうか。

2015年6月、サウスカロライナ州のチャールストン市で、アメリカの人種対立の現実を示す悲劇的な出来事が起きました。ある20代の白人青年が、黒人系のメソジスト教会に入って、聖書の勉強をしていた信者に銃を撃ったのです。その場で牧師を含む信徒9人が死亡しました。家族はもちろん多くの人々が怒りました。しかし、わたしが皆さんに紹介したいのは、10日後の葬送式で起きたことです。この日の葬送式には、当時のアメリカ大統領のオバマも出席し、追悼の辞を述べました。葬送式の式場は重苦しい雰囲気でした。追悼の辞が終わる頃、思いがけないことが起こりました。しばらく沈黙していたオバマ大統領は、突然聖歌を歌い始めました。その聖歌は、わたしたちに耳馴染れた「アメージング・グレイス」でした。すると、そこに出席していた牧師たちも一斉に立ち上がり、聖歌を歌い始めました。続いてオルガンが演奏され、聖歌隊と6千人余りの参加者も全員立ち上がり合唱しました。涙を流しながら歌っている人も多かったです。聖歌が終わると、オバマ大統領は犠牲者一人一人の名前を呼んで「恵みにあずかった」と叫びました。すると出席者たちは歓声をもって答えました。まるで祭りの一場面のような様子でした。

皆さんもご存知の通り、この「アメージング・グレイス」はイギリス聖公会の司祭ジョン・ニュートンによって作詞された聖歌です。彼は若い頃から、黒人奴隷を輸送するいわゆる「奴隷貿易」に携わり富を得るようになりました。けれどもその後、自分の過ちと罪を悔い改め、信仰の道に戻ってきまし

た。そして、司祭になりました。その後、作詞されたこのアメージング・グレイスは、自分の罪を赦してくださった神様に捧げる懺悔と感謝の聖歌です。ところで、どうしてオバマ大統領は犠牲者を追悼するところで、懺悔と感謝の聖歌を歌ったのでしょうか。そして一体どうして犠牲者たちが恵みにあずかったと言うことができたのでしょうか。

それは、オバマ大統領が「アメージング・グレイス」を先唱した瞬間、その追悼の場に集まった人々に新たな気づきがあったからでしょう。それは、わたしたちも罪人であり、神様がわたしたちの手に負えないほど多くの過ちと罪、そして負い目を帳消しにしてくださったということに新たに気づいたからです。そして、わたしたちが赦さないと、いつまでも怒りと復讐、恨みと絶望の記憶だけを胸に抱いて生きていくことになるということが新たに分かったからです。ですから皆がこの聖歌を歌い、この聖歌を通して胸に納めていた怒り、悲しみ、絶望、敵対感を、癒し、慰め、希望へと変えようと努力したのです。

赦しは誰にとっても難しいことです。赦しができるようになる方法を探してもなかなか見つかりません。けれども信仰者にとって一つ良い方法があります。それは意識して記憶することです。間違った人々とか罪を犯した人々を意識して記憶することではなく、わたしたちが神様を信じて従うという理由一つで、神様はわたしたちを神の子として受け入れてくださったという事実を意識して記憶することです。主の祈りを唱える時も、「わたしたちも人を赦します」という一節を意識して記憶することも良い方法になるでしょう。そしてイエス様が、自分を十字架にかけた者たちのために、「父よ、彼らをお赦してください」(ルカ 23:34)とお祈りなされたことを意識して記憶することも良い方法になると思います。神様は、このような私たちの努力をご覧になって、そしてわたしたちの祈りをお聞きになって、いつかわたしたちに赦すことができる力と恵みを与えてくださるでしょう。

この一週、神様がわたしたちを限りなく赦し、いつも愛しておられるという信仰を通して、隣人や兄弟の過ちと罪を赦すことができる勇気と力を得られますように心からお祈りいたします。